

菅原正博先生追悼文

2022年2月12日にご逝去された、本学大阪キャンパス教授、菅原正博先生を偲び、親交の厚かった7人の方々から追悼文を寄せていただきました。

【略歴】

1936年4月11日 生まれ
1959年 大阪市立大学（現 大阪公立大学）経済学部卒業
1961年 大阪市立大学（現 大阪公立大学）大学院経済学研究科修士課程修了
1964年 同研究科博士課程単位取得退学
1964～68年 甲南大学 経営学部 専任講師
1968～70年 大阪大学 経済学部 経営学科 専任講師
1970～76年 関西学院大学 商学部 助教授
1976～83年 株式会社F・B・O 総研
1983～84年 岡山大学 経済学部 教授
1984～90年 龍谷大学 経済学部 教授
1991～2013年 宝塚造形芸術大学（現 宝塚大学）造形学部 教授
2011～15年 杉野服飾大学 非常勤講師
2012～14年 中国浙江省杭州市の中国美術学院 客員教授
2013～18年 中国浙江省杭州市の浙江農林大学 客員教授
2014～17年 宝塚大学 講師
2019～22年 国際ファッション専門職大学 教授
2022年2月12日逝去。85歳。

※略歴の作成にあたっては、ご家族および在籍されていた各大学の担当者の方にご確認いただきました。感謝申し上げます。

1969年、経済学博士（大阪市立大学）。主たる専門分野はマーケティング。1966年以降、約30年にわたり住友ビジネス・コンサルティング社の主催する「住友マーケティング講座」を通じて1000名にわたる実務家に対してMBAレベルの実学教育を担当。また、84年から6年間、龍谷大学大学院修士課程でMBAレベルの実学教育を行ってきた。日本感性工学会、日本ファッションビジネス学会、日本ダイレクトマーケティング学会の理事を務めた。



写真1 いつも笑顔を決やされなかった菅原先生
(2020年高原昌彦撮影)

【主要業績目録】

〈著書〉

- 1981『ファッション・ディテール』（チャネラー、
本山光子との共著）
- 1985『売り場づくりに強くなる本』（チャネラー、
市川洋子・山本ひとみ・沢井敬子との共著）
- 1986『ファッションアドバイザー入門（接客編）』
（チャネラー、山本ひとみ・藤原由美との共著）
- 1988『ファッションアドバイザー入門（スタイリス
ト編）改訂版』（チャネラー、山本ひとみとの共著）
- 1988『ファッションアドバイザー入門（接客編）改
訂版』（チャネラー、山本ひとみとの共著）
- 1988『VMDに強くなる本』（チャネラー、山本ひとみ・
流晶子との共著）
- 1989『ショップマスター読本』（チャネラー、山本
ひとみ・本山光子との共著）
- 1991『ファッション・バイヤー&コーディネーター』
（チャネラー）
- 1995『ファッション・バイヤー MD』（ファッション
教育社）
- 1997『次世代マーケティング』（中央経済社、市川貢・
山本ひとみらとの共著）
- 1998『次世代流通企業』（中央経済社、増田大三・
吉田裕之・山本ひとみらとの共著）
- 1998『次世代広告コミュニケーション』（中央経済社、
市川貢・増田大三・山本ひとみらとの共著）
- 1999『ファッション・マーケティング』（ファッショ
ン教育社、本山光子との共著）
- 2000『次世代ショッピングセンター』（中央経済社、
田中道雄・吉田裕之・山本ひとみらとの共著）
- 2001『次世代流通サプライチェーンマネジメント』
（中央経済社、吉田裕之・弘津真澄・山本ひとみら
との共著）
- 2004年『アパレル・マーチャンダイジング』（ファッ
ション教育社）

- 2010『企業ブランディング——新世代マーケティング』（中央経済社、山本ひとみ・大島一豊との共著）
- 2010『リテール・ブランディング——新世代流通企
業』（中央経済社、山本ひとみ・大島一豊、野口淳
との共著）
- 2011『コミュニティ・ブランディング——新世代
ショッピングセンター』（中央経済社、山本ひとみ・
大島一豊・野口淳との共著）
- 2012『メディア・ブランディング——新世代メディ
アマーケティング』（中央経済社、山本ひとみ・大
島一豊らとの共著）

〈学術論文〉

- 2002「21世紀のファッション・ビジネス研究の課
題と展望」『ファッションビジネス学会論文誌』7:
45-54
- 2017「ファッション感性価値評価に関する一考察
——レパトリー・グリッド・アプローチ」『日本
感性工学会論文誌』16(3): 371-378（鶴鉄雄との
共著）
- 2018「「世界新秩序の模索」と「広報学」への射程
——マクロ広報学のフィージビリティ分析」『広報
研究』22: 117-125（石橋陽・築地達郎との共著）
- 2019「深層ニューラルネットによるファッション画
像のシルエット識別の実現に向けた試み」『日本感
性工学会論文誌』19(1): 117-126（鶴鉄雄・西村
治彦との共著）
- 2019「社会広報学を支えるコミュニティ・エンゲ
ージメントの役割——専門職大学広報編」『広報研究』
23: 126-132（築地達郎との共著）
- 2021 Silhouette Classification of Designer's
Collections in Luxury Fashion Brands. International
Journal of Affective Engineering 20(1): 33-40（鶴
鉄雄・西村治彦との共著）

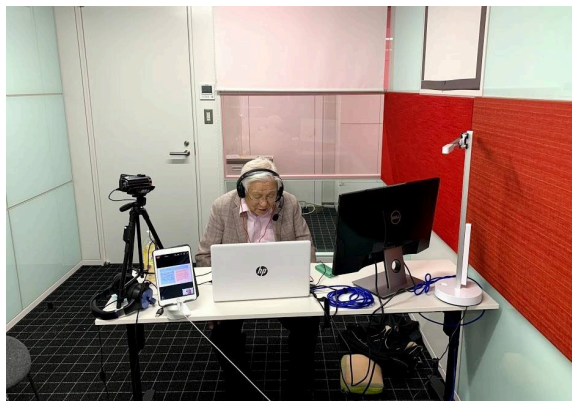


写真2 オンライン授業に臨まれる菅原先生
（2021年高原昌彦撮影）

【追悼】

悲しみは深まるばかり

国際ファッション専門職大学
松岡依里子

菅原先生との出会いは、2013年ファッションビジネス学会関西支部大会でした。私が、大阪の短大に勤務し始めたところで、ファッション教育のあり方についてのたくさんの資料を提供していただきました。その後、ファッションビジネス学会の研究会に所属し、コトラー勉強会をはじめ、たくさんの勉強会への参加の機会とアドバイスをいただきました。日本感性工学会での企画セッションや日本家政学会での発表では、資料提供やご助言など多大なる力をいただきました。また、仕事で辛い時期があったのですが、その際、話を聞いて励ましてくださいました。知識や創造性の素晴らしさだけではなく、非常に優しく、具体的に研究ができるようにサポートしてくださるので、たくさんの方がそのお人柄を感じられているかと思います。

2019年4月に同じ大学に勤務することとなり、私の研究をどんな風にしていこうかと考えておりましたとき、「松岡さんは家政学が本流だから、衣服選択は重要なテーマだよ」と示唆をいただきました。そこで、どんな研究の可能性があるの kariサーチを始めました。「衣服選択」は1980年代に多く研究されておりましたが、新たな視点をいただき、2019年5月、日本家政学会にて発表しました。その後、本学の共同研究に採択され、研究を進めることができたのも菅原先生のおかげです。「ワードローブマネジメントと結びつけた衣服選択」の研究に取り組めたことは、ずっと家政学の中で迷走していた私の研究が体系化できたといえます。2022年3月7日には、本学の公開講座で話す機会をいただきましたが、この講座を聞いていただけなかつ

たことが残念でなりません。菅原先生に聞いていただきたかった。当日は、先生のことを思いながら話しました。先生だったらどんなふうコメントくださるだろうか……。でももうそのお言葉はいただけません。

私の中で、大きな火が消えたようになりました。あるとき、先生の講義動画が家族の方から送られてきました。声を聞かずに涙が溢れ、全部を見ることができませんでした。

10年足らずの先生との研究を通しての交流は、私の心の糧となりました。最後にお話ししたのが、2021年10月10日開催のオンラインでの読書会でした。このご時世でお見舞いにも行けず、最後にお会いすることもできず、悲しみは深まるばかりですが、先生から受け継いだ研究や教育の生き様を私も受け継いで今後も社会に貢献できるように邁進したいと思います。先生からいただいた数々の指導に感謝し、いただいた宝を大切にします。先生、ゆっくりおやすみください。

2004年「デザイン経営」

故 菅原正博先生を偲んで

国際ファッション専門職大学
大島一豊

菅原先生との出会いは、2004年に遡ります。その年の9月、宝塚造形芸術大学（現宝塚大学）専門職大学院デザイン経営研究科の説明会に参加したときでした。私は、もともと企業の広告広報、コミュニケーション分野に興味を持ち、大学でも広告広報、メディアを専攻しました。卒業後、マーケティングや販売促進企画の企業に就職、のち広告代理店に転職してキャリアを積み、20余年のサラリーマン生活にピリオドを打ち、起業したときでした。自社の事業戦略を立てるうえで今までの経験から得た持論だけでは同業他社からの差別的優位性を築くことができないと

考えていた時期でした。そのとき、ある新聞広告を目にしました。それは、44歳にして初めて目にした「DESIGN MBA」（デザイン経営）という広告でした。当時、ビジネス系コンサルティング業に携わるには中小企業診断士やMBAなどの資格や学位を取得することが一般的でした。しかし、それらは私にはどうしても納得ができないカリキュラムでした。明確に何が納得いかないのかわからないままに「DESIGN MBA」（デザイン経営）にすぎるように専門職大学院の説明会に足を運びました。

菅原先生は、その当時の専門職大学院デザイン経営研究科の研究科長でした。私より10～20歳も若い参加者がほとんどである中、40代の私を見て驚かれたのか説明会が終わるや否や声をかけていただきました。このときが菅原先生との出会いで18年間のご縁の始まりでした。

説明内容は、期待以上に私の心に響くキーワードがたくさんありました。ただ、2年間の大学院生としての生活を考えると、入学は躊躇せずにはおれません。2年間の学費と勉学に要する時間が確保できるかどうかを考えざるをえませんでした。長男長女の大学在学の時期と重なっていたため、3人分の学費を背負うことは、起業したばかりの私にとって覚悟を必要としました。

ただ、このような大きな障壁も取り払うほど、菅原先生のデザイン経営研究科での教育内容はインパクトがあり、中小企業診断士やMBAのカリキュラムと明らかに異なっていました。そこには、今までや今ではなく、これからの社会に必要な力量を備えた人材を養成する視点がありました。そのような教育理念、ビジョンに共感し、入学願書を出す決心をしました。

それから2年間、大学院生として迎えていただき、学費分以上を学ぶ姿勢を維持しつつ、2006年9月（第1期秋期生）デザイン経営修士（専門職）（MBA in Design）を取

得しました。その1ヶ月後、菅原先生から学会という場での研究発表に導かれました。右も左もわからない学会での発表には不安を感じないとは言えませんでした。菅原先生は、手取り足取り研究内容のまとめ方や発表までの間、綿密なりハーサルにお付き合いくださいました。

卒業後も専門職大学院の実務家教員として迎え入れていただき、大学院科目の教科書編集や新世代ブランディングシリーズの4冊（中央経済社）の構想、企画から執筆編集を一任させていただくなど、面倒を見ていただきました。その後も数々の学会での研究発表などにご一緒させていただいたことも今では思い出として残っています。厳しさやさしさは私への激励であったと思い返されます。そして3年前、菅原先生のご尽力でこの大学に就任してからも年に数回は、学会や関西での研究会、プライベートでの意見交換などの際にお会いしていました。

就任後も私の個人研究テーマは、一貫して「デザイン経営」です。2018年に経済産業省・特許庁から「デザイン経営宣言」が発表されました。「先生、ようやく時代が追いついて来ましたね。これからは私はデザイン経営で行きますよ」とお伝えしたときの菅原先生が微笑んでおられたお顔は脳裏に鮮明に残っています。今後、この「デザイン経営」を、私の使命として次世代への教育、社会への提案・実践してゆく所存です。最後に菅原先生とのご縁、「デザイン経営」との出会いに感謝するとともにあらためて菅原先生のご功績に深甚なる敬意を表し、心からご冥福をお祈りします。菅原先生、ありがとうございました。

菅原正博先生との邂逅

国際ファッション専門職大学
高原昌彦

2001年3月。私は19年間勤務していた株式会社ワールドを早期希望退職した。

これまで培ってきた知識や経験、情報網を生かし後進を育てたい。さらに他の企業でもお役に立ちたい。そんな一心からファッションコンサルタント事務所と講師業を始めた。

実務経験を活かしたコンサルタント業はともかく、いくら経験や知識があったとしても、実業界の経験がない大学や専門学校の学生たちに、専門的・学術的に講師としてわかりやすく話すことはたやすいことではないと考えた。そこで、ファッションビジネスを語る講師として学生たちに対峙できるようにするために、私は当時、神戸ファッション美術館のライブラリーで多くの書物や資料を漁った。

その書物や資料の中で、よく目にしたのが「菅原正博」、菅原先生のお名前だった。当時は直接お会いしたことがなかったので、どんな方だろうといった素朴な感想しかなかった。

独立後1年ほどして、ファッションビジネス学会の正会員になった。学会の研究会終了後の懇親会のときである。

「高原先生は甲南女子大学で講師をされているのですか」と突然、菅原先生からお声がけをいただいた。最初はどなたか存じ上げもせず「はい、文学部でファッションを教えています」とこたえた。

「ファッションを文学部で!!」菅原先生のお声がさらに大きくなった。それから菅原先生と、失礼ながらお酒を交えて2時間ほどお話をさせていただいたであろうか。

私が書物や資料でしか知りえない偉大な研究者である菅原先生と直接お話ができたのである。それも講師を始めたばかりで右も左もわからない、ひよっこ研究者である私に気軽

に先生の方からお声がけいただいたのである。

あまりの嬉しさから、私が文学部のメディア表現学科でファッションを「個人や団体の表現媒体の一つ」として教えていること、ファッション表現だけに限らずファッションマーケティング、開発論、テキスタイルの基礎知識などを教えていることを話すと、とても感激していただき「理事長と学長に直接お会いして、すばらしいことだとお伝えしたい」と言っていた。それから1カ月もしない間に、菅原先生が当時の理事長や学長に直接アポイントを取られ面談された、という行動力には驚かされた。

菅原先生からはそれから20年にわたり、実にさまざまなことを私にご教示いただいた。

ファッションビジネス学会での研究会にとどまらず、有志を集めて開催された「菅原塾」にも参加させていただき、今のファッション教育の問題点やファッションMBA育成のためのカリキュラム、ファッション実務家教員の育成カリキュラムを考えたことは、今の私の血となり肉となり礎を築くことができたことより感謝している。

また、そのときに菅原先生より教わった知識をもとに、織研新聞から2013年6月、自身2冊目となる『新鮮!ファッションビジネス入門』という本を出版する際には、惜しげもなくお手元の大切な資料をお送りいただいた。大変参考になり、出版後はアマゾンの書評にもうれしいお褒めのお言葉をくださった。

日本教育財団が運営する大阪モード学園から、「教育課程編成委員会」のメンバーに研究者で適任の方がいないだろうか、という相談を受けた際、私はすぐに菅原先生を推挙した。菅原先生は学者としてだけではなく実務者としても、大阪モード学園のカリキュラム編成にさまざまなご意見を出され、先鋭的なファッション教育にもご尽力された。国際

ファッション専門職大学が開学されるときには、菅原先生とともにいろいろな研究人材を推薦させていただいたこともいい経験であった。一昨年からは、やはり菅原先生を中心とした有志で「実務家教員ネットワーク」を結成し、実務家教員の結束をさらに固め、質の高い教員を増やして行こうとしていた矢先の訃報であった。

菅原先生のファッション業界に対する熱い思いは、私たちの心に脈々と流れております。

本当にありがとうございました。感謝してもしきれないほどのさまざまな教えとファッション教育への情熱をいただきました。先生の信念、情熱と業績に追いつけないまでも、決して衰えないように私たちもファッションビジネス教育、ファッション実務家教員の育成に邁進してまいります。

どうぞ安らかにお休みください。

合掌。

菅原正博先生を偲ぶ

共立女子大学
宮武恵子

菅原正博先生のご逝去に対し心よりお悔やみ申し上げます。

私が菅原先生のお名前を知ったのは、先生の数多い著書がきっかけです。私は、大学卒業後、アパレル企業の企画、デザイナーとして仕事をしてきました。フリーランスとして独立した後に、専門学校や短期大学の非常勤講師として、授業では菅原先生ご執筆の書籍を複数使用いたしました。

ファッションビジネス学会の研究会などで、先生と何度かお会いする機会があり、ご挨拶させていただきました。次第に、私は大学・短期大学の専任教員として、仕事をした

は、業界経験はあっても学位の取得とともに研究業績が必要と感じていました。その指導を菅原先生にお願いしたいと強く思うようになり、研究会後の食事会で、思い切ってその思いを伝えました。先生は、快諾してくださり、2003年4月に、宝塚造形芸術大学大学院 造形研究科 造形・デザイン専攻 博士後期課程に入学しました。先生は、論文テーマを「ファッション SCM」と決めてくださいました。その当時の業界では、研究として確立されていないテーマでした。

大学院では、研究のすすめ方について基本的なことから一つひとつ丁寧に教えていただきました。文献の探索の仕方、原書の読み方、研究方法などです。実務経験の利点を生かすだけの論述ではなく、まず先行研究を確かめることが重要で、それには複数の原書を読まなければならないとされていました。そこで、原書を読む訓練から始めました。わからないところがあっても読み進む、複数回読むにつれて内容が理解できるようになる、最終的には速く正確に読破できるようにする、これが原書の読み方と教えていただきました。そして、事実に基づき、独自の研究方法と分析を通して、論証しなければならないと指導してくださいました。

この博士論文は、実務経験がなければできない市場調査を毎週行い、データを記録し分析する研究方法が特徴です。大学院の入学時には、短期大学の専任教員として勤務していましたが、この論文の評価もあり、大学の専任教員となることができました。先生の研究室での指導は長時間に及び、帰宅は遅い時間になることも度々ありました。同じ電車で帰宅するため、車内においても研究室での議論の続きを熱く語ってくださる先生の姿が思い出されます。2006年3月に宝塚造形芸術大学大学院 博士(芸術学)の学位を授与されました。ひとえに先生のおかげと感謝しております。

その後も、先生からご紹介いただきました

海外ブランドの現地調査を含めた研究に関わるチャンスを得ることができました。加えて、先生主催の複数の研究会や学会の企画セッションなどにもお誘いいただきました。私自身の研究のあり方、また研究者としての道筋もこれらの集まりを主宰しておられた先生を抜きにしては考えられないほど大きな影響を受けています。そして、これらの研究業績もあり、母校にて現職に就くことができました。東京に拠点を移してから、学会の大会などでは先生からいつも励ましの言葉をかけていただけたことが大きな喜びであり誇りでもありました。大学院で指導を受けていた頃、また卒業後も食事を楽しむ機会も複数ありました。今後の研究や業界展望など、たくさんお話をさせていただきました。笑顔で語る先生のお顔を思い出します。

菅原先生は、業界の繁栄とともに、リーダーとなる専門教育者のための教育者を育てることに非常に情熱をそそぎ、ファッションを学問として発展させることに特別な信念とこだわりを持っておられたと思っています。私がかつてもっとも心に残っていることは、実務経験に誇りを持ち、それを生かす研究者になることを強く教わったことでもあります。これが、その後の私の大学教員としての人生に大きな影響をもたらしています。

つねに前向きで、意欲的で新しい研究をする菅原先生を尊敬しています。私は、その姿に刺激を受けて、新しいことに挑戦する勇氣をもらいました。菅原先生の教えを受けた多くの後輩が先生の意思を受け継いで、ファッションの研究の発展に寄与することを祈念申し上げます。追悼の辞とさせていただきます。

菅原先生追悼文

上田安子服飾専門学校

鶴 鉄雄

私が初めて菅原先生の名前を目にしたのは、ご著書の『ファッション・マーケティング』（ファッション教育社、本山光子との共著）の著者としてでした。1999年、63歳のときに刊行されたものです。

先生との実際のお出会いは、2013年に開催されたファッションビジネス学会関西支部合同研究会でした。発表の場で、声をかけていただきました。当時、私は大阪市立大学大学院に55才で入学し、「好きなモノ」に関する研究を行っていました。菅原先生のご著書『ファッション・マーケティング』の中に書かれていた、「着こなしニーズの予測の公式」を、自身で理解するために図解した「着こなしニーズのパターン」を発表いたしました（この図は、鶴鉄雄、菅原正博 2017「ファッション感性価値評価に関する一考察——レパートリー・グリッド・アプローチ」『日本感性工学会論文誌』16(3): 371-378に掲載）。

発表の数日後、私の勤務先の学校を訪ねてくださり、第3回日本感性工学会 関西支部大会（相愛大学、2013年）で発表するようにと勧められました。この発表時に菅原先生を慕う方々と出会い、現在でも日本感性工学会やファッションビジネス学会での活動とともにさせていただいています。京都女子大学で2015年に開催された第10回日本感性工学会春季大会のときには、学会メンバーとして企画セッションに加えていただきました。「ファッション美学」の概念を図解にしたものに関連して、空海の枕本尊の話がされ、「これはファッション美学の曼陀羅図だ、自分にとっての枕本尊はこのiPadだ」とおっしゃっていました。菅原先生は今までに書かれた書籍や研究資料、毎朝届く新聞などをす

べて iPad の中に入れていらっしやり、目が覚めるとまず朝刊を読んで時代の流れを捉えられていました。80 才を迎えられる頃のことでした。

2016 年 4 月に兵庫県立大学大学院応用情報科学研究科教授の西村治彦氏を紹介していただき、その後期博士課程に入学しました。その後は、人工知能の実装をテーマに研究しなさいという指針をいただき、研究も文系から理系へとシフトしました。

菅原先生は学会活動を通してさまざまな分野の方とのコミュニケーションを取ることを大切さをつねに語られていました。声を掛けていただき、私の研究の質を引き上げて下さり、その後 10 年間に渡ってさまざまな得難い経験をさせていただき、感謝しております。もっと一緒に居ていただきたかったです。この場をお借りしあらためて、偉大な研究者であり聖人と呼ぶに相応しい人格者であった菅原正博先生に心からの感謝を申し上げ、ご家族の皆さまへのお悔やみを申し上げます。

後年、少し足がおぼつかない様子で杖を持たれていましたが、私が知る菅原先生はいつも格好よく、研究ではつねに海外の最新の書籍から古典や原書まで、話題が豊富で話が面白く、ファッション以外の幅広い知識をお持ちで、心は熱く、いつもポジティブで、またとても繊細な方でした。

ひとつ私的なことを明かしたく思いません。2019 年に開かれた第 5 回国際感性工学会シンポジウム (The 5th International Symposium on Affective Science and Engineering、國學院大學) での発表の前日の夜に口頭発表のリハーサルをしていただいたときのことで、初めての英語発表だったので、私が Goodreader という iPhone のアプリを使い、録音されたイギリス英語の発音を録音し、スピーカーから音を出して発表すると申し出たところ、鬼のような形相で叱られました。その夜、家に戻って必死で練習し、翌日には生まれて初めての辿々しい英語

で発表を行ったことを報告させていただきました。叱っていただいたことも本当に懐かしく、また得難い経験をさせていただきました。

2021 年 3 月に 5 年かかって博士課程を修了したときには、とても喜んでくださり「博論祝い会」を開催してくださいました。その後、いただいたメッセージには「自分事のように思えて、元気が出ました。奥さんが、帰り間に『長かったです』とつぶやいておられました。その期待が実現して良かったです。『博論』取得が目的ではなく、それを手段として使い倒す責任があります。『博論』は、心の支えです。今後は、お互いに『仲間』として、ファッション経営教育に貢献したいですね」と大変光栄な言葉をいただきました。そこにまた、菅原先生の謙虚さと優しさを強く感じました。

2021 年 8 月から 11 月末にかけては、ファッションビジネス学会の研究委員会の委員長を務められていました。リモートの読書会では、6 名の研究者をお誘いになり、「ファッション職業教育機関の英日比較研究」というテーマで、*Fashion Buying and Merchandising: From mass-market to luxury retail* (Miguel Hebrero, 2015, CreateSpace Independent Publishing Platform)、*Fashion Buying and Merchandising: The Fashion Buyer in a Digital Society* (Rosy Boardman, Rachel Parker-Strak, Claudia E. Henninger, 2020, Routledge) を取りあげられました。菅原先生が 1995 年、59 才のときに刊行された『ファッション・バイヤー MD』(ファッション教育社) の内容が、これらの最新の海外の書籍と類似する部分が多々あることに驚きました。10 年前の初対面の日から感じていた「ファッション経営教育に貢献したい」という菅原先生の変わらぬ熱い思いを受け継ぎ、「未来を支える若者に伝える」ことを実行しなければと強く感じています。

あの人なつこい笑顔に再び会うことができないことを心底残念に思っております。謹ん

でご冥福をお祈り申し上げます。

菅原正博先生追悼文

国際ファッション専門職大学
平野 大

菅原先生と私とのご縁は、2016年に私がファッションビジネス学会ファッション商業論カリキュラム研究部会（以下、カリキュラム研究部会）に入会させていただいたときから始まりました。私の研究領域はフランスの帽子であり、ファッションビジネスの分野は、当時それほど詳しくありませんでした。カリキュラム研究部会の先生方は、専門外のそうした私を温かく迎えてくださりました。この研究部会の中核を担われておられたのが菅原先生でした。

さらに2018年には、菅原先生はコトラー研究会を新たに立ち上げられました。この研究会にはカリキュラム研究部会のメンバーも数多く参加いたしました。この研究会はフィリップ・コトラーによる *Marketing Management: European Edition* を原書で読んでいくという大変意欲的なものでした。ファッションビジネスを学ぶうえで、マーケティング・マネージメントの知識は必要不可欠なものです。その最良の教科書が *Marketing Management: European Edition* であり、これを原書で読めばマーケティング・マネージメントの核心が把握できるとの菅原先生のお考えのもとに、この研究会は始動していきました。研究会のメンバーは *Marketing Management: European Edition* の中の1章を割り当てられ、その章を読み込んだうえで、研究会でその章に関して発表を行っていきました。大変でしたが、とても良い勉強となりました。

また菅原先生は先見の明をお持ちで、つね

に未来を見据えながら研究・教育を行っておられました。先生は早くからAI（人工知能）の将来性を認識しておられました。ファッションビジネスにおいてもAIが今後必要不可欠なツールになり得ること、研究領域としてファッションAIがますます注目されてくることが随分と前から仰ってました。その菅原先生の教えを忠実に実行なさったのが鶴鉄雄先生でした。鶴先生からは、私もファッションAIについていろいろご教示いただき、現在も苦労しながら、ファッションAIについての研究を行っております。

今、こうして振り返ってみると菅原先生の周りには、いつも多くの人たちが集まっていたように思われます。菅原先生は、周りについてどう人たちのことを一人ひとり、真剣に考えておられました。そして、その一人ひとりに菅原先生はいつもの確かなアドバイスをさせておられました。私もその一人です。そのアドバイスは、それをいただいた人の心の中で育っていき、形を成していったように思われます。私などはまだまだ形にしきれてはおりませんが、いつかいただいたアドバイスを一つの形にしていければと考えております。

心より先生のご冥福をお祈り申し上げます。

菅原正博先生を偲び、
大学設立の礎をくださり感謝を
申し上げます

国際ファッション専門職大学
川中 薫

菅原正博先生に初めてお目にかかったのは2017年でした。菅原先生は、大阪にある上田安子服飾専門学校（現 上田安子服飾専門学校）の1階で、日本感性工学会の第12回春季大会に関する研究会を開催されていました。研究会にお呼びいただい

たとき、わたしは京都大学のアジア・アフリカ地域研究研究科で博士号を手にしたばかりの若輩でした。折しも博士論文の一部を論文にしたものを同学会に投稿したところで、投稿原稿を持参して緊張しながらお訪ねしたのを覚えています。

それまでのわたしはおもに南アジア関係の学会や日本文化人類学会などで博士論文について発表をしていたこともあり、菅原先生とお会いするのは初めてでしたが、日本のファッション業界やその実務教育の課程に精通され長年尽力されてこられた先生とは思えないくらい、大変気さくに話しかけてくださり、また、インドのアパレルに関する拙稿を楽しそうに読んでくださいました。若輩者に勇気を与えるがごとく、大変ユニークな研究のお話で参考になったと言ってください、日本のことを勉強するとよりよいですよということで、さまざまなお話をしてくださいました。緊張していたので、具体的な内容を忘れてしまったのですが、どうやら先生の楽しいコメントをお聞きしていると査読のリジェクトはされないようだという気がしてきて、良かったと思って帰ったことだけは覚えています。

その後2週間ほどして、菅原先生から履歴書と業績書を送るようというメールをいただきました。今度、新しく大学を作ろうとしている専門学校さんがあり、あなたを東京の設立準備室の責任者、後藤京子プロジェクトリーダーに推薦しておいたから良ければ送ってくださいという内容でした。現在の国際ファッション専門職大学の母体となる日本教育財団のモード学園との出会いでした。

この話は望外にもあれよあれよと展開し、履歴書と業績書をお送りして約1週間後には、大阪からモード学園の小柳将和統轄責任者と水本一司前統轄責任者が、京都大学の東南アジア研究所でお借りした東南亭という会議室においてくださることになりました。そこで初めて当時の大学の設置構想の概要をお

聞きしました。お二人からは、当時の教学アドバイザーのもとでつくられた内容について、わかっているだけですがとお聞きしたのですが、大変僭越ながらそのままではとても大学に成りえないと思う点について、率直な意見を申し上げたことを覚えています。また、別日には大阪のモード学園の応接室で菅原先生とともに後藤リーダーに直接お会いし、その後、東京の本部に来るようというので、東京でより詳しい設置構想の資料を拝見し、当時の構想の教学アドバイザーにもお目にかかることになりました。その際に見せていただいた設置構想案は、大学の研究員の端くれの身から見ても、やはり厳しいものでしたので、今後の見通しについていくつか質問をさせていただきました。しかし私ではこれをお手伝いすることはできないと思いますということで丁重にお断りさせていただき、帰阪したことを覚えています。今考えても、大変な無礼者かつ未熟者であったと思います。

そのときは、せっかく、菅原先生にいただいた就職活動の御恩を無下にしてしまったという気持ちがありました。しかし、菅原先生はそのことを責めたりなさらず、前と同じようにニコニコと楽しそうに接してくださいました。就職のことは話題になさらず、その後も、一人の駆け出しの研究者に対し、同じ学会の大先輩として、筑波大学の東京キャンパスで開かれた次の第19回日本感性工学会大会での発表準備や、名古屋大学で開かれた第13回春季大会の準備や研究会にむけて、何度もAIや感性教育に関する自主勉強や必要なアドバイスをしてくださいました。当時の勉強会が、未熟なインドの地域研究者に、新たな分野への視野を広げてくださったことは間違いありませんし、国際ファッション専門職大学の設置におけるカリキュラム構想においても生かされたわけです。

菅原先生のご紹介のご尽力について、未熟者がその縁を切ってしまったにもかかわらず、意外にも後藤リーダーから、しばらくし

て連絡がありました。この文章をどう思いますか、というような気軽なものでした。はい、こう思います、などと、わたしも気楽に言いたい放題しておりました。そのような往復書簡を繰り返して、また東京に来ませんかということで、不定期にお伺い始め、そのうち夏には、設立準備室の室員になっていました。

しばらく東京と京都の往復をして、大学教育を担うことのできる教員募集に奔走したり、設置の趣旨書と一般に言われる設計図をゼロから書いたりする仕事は、大変やりがいのあるものでした。ただし、つねに時間との勝負で、2018年には自主的に東京に移住しました。その間、同じゴールを目指す仕事仲間と必死の思いで審査を乗り切り、多くの方の協力を得て、認可を得たときは、心からほっとしました。認可は、文科省から電話で通達されました。事前に知らされていなかったもので、いつものように業務電話を受けた後藤リーダーが神妙な面持ちで話し始めたことに同じ部屋の皆が気付いたとき、一瞬誰もが息をのんでパソコンを打つ手を止めました。水を打ったようにシーンとなりました。ダメかもしれない可能性も十分にあったからです。電話が終わって、後藤リーダーが、川中！と行ってハイタッチをくださったとき、部屋が沸きました。そして、2019年に開学。新1年生を入学式で迎えてから4年後の今年は

完成年度を迎えることになりました。

さて、菅原先生を偲ぶ寄稿で、なぜこれほどまでに長い設立の経緯を記したのか。それは完成年度を迎えた2022年度に、おそらくご退職の予定であった菅原先生にお伝えして、いろいろと振り返り、何でも楽しく受け止めてくださる先生と思い出話をするのがかなわなくなったからです。2021年夏、ケガによる入院をされても、意識はいつもと変わらずお元気で、ズームで教授会などにも出席されていた先生が、2021年度末に突然お空にかえられたとお聞きしたとき、私はしまったと思いました。今ここに、その反省を踏まえて、本来一緒に笑いあっていたか予定であったお話をお送りいたします。

就職したからいいんだということが一切なく、いつも次の新しい実務教育とは、次の感性教育研究とは、なんでしょうねとって話しかけてくださっていた先生を、私は誰よりも前向きに、次へ、次へと行動を起こされていた教授だと思います。図らずも同僚になるという偶然をいただいたのみならず、本学設立の礎をくださった感謝を心から申し上げます。

菅原先生、お別れです。どうか先生が尽力された大学を見守っててください。そして、安らかにおすごしてください。